

迷子のユピカ

作・稲邊弘康

【登場人物】

ユピカ

ソライ

カストール／タナトス

ポルックス／ヒュプノス

ジェニーちゃん

楽士1／「わたし」 18号

楽士2／「わたし」 281号

楽士3／「わたし」 483号

楽士4／「わたし」 810号

中央から4分割に段差の付いた舞台、それぞれに音のなる仕掛けがある。無機的な要素と有機的な要素が合体した抽象的な空間。中央に【空への憧れ(を象徴化したもの)】が上へ向かっている。

【ユピカとソライ篇その1】

楽士たち、舞台に登場。歩くスピードは一定である。

その足音からストンプがはじまる。

① ストンプ「楽士たち／ユピカ」

基本の足音に、楽士がひとりずつ違う音を出す。

楽士全員の音がにぎやかになってきたころ、そのリズムによって、ユピカはいつぱいっぽ、跳ねるように舞台の上を跳んでみる。

ソライ、空への憧れからひよこつと、顔を出す。

楽士たち、動きがピタッと止まる。

ソライ こんばんは。

ユピカ だあれ？

ソライ 僕？

ユピカ うん。

ソライ ソライ。

ユピカ 変な名前。

ソライ 君は？

ユピカ あたし？あたしユピカ。

ソライ 変な名前。

ユピカ …。

ソライ どうしたの？

ユピカ ソライ君。

ソライ はい、僕ソライです。

ユピカ 何してるの、こんなところで。

ソライ ああ、いやね、これに引つかかっちゃって。

ユピカ へえ。

ソライ あ、あのね、助けてくれない？

ユピカ ……どうやって？

ソライ 手、引っ張って。

ユピカ わかった。

ユピカ、ソライの手をひっぱる。

楽士たちはその成り行きをかたずをのんで見守っている。

空への憧れからソライが出てくる。

ソライ ありがとう。助かったよ。

ユピカ どういたしまして。それじゃあ。

ソライ、ユピカの行く道の前に立ちはだかる。

ユピカ ちょっと、どいてよ。

ソライ もう暗い時間だよ。帰らなくて良いの？

ユピカ ソライ君に関係ないでしょ。

ソライ 何してたの、こんなところで？

ユピカ 歩いてるだけよ。

ソライ ……

ユピカ なによ。

ソライ こんな時間まで歩いてたら、お母さん心配するんじゃない？

ユピカ するかもね。

ソライ もし、心配してなかったらどうする？

ユピカ え？

ソライ 君が「いらない子」って思われてて、全然気にもされなかったらどうするの？

ユピカ その辺は大丈夫よ、あたしいつもいい子にしてるもの。

ソライ でも、それだったら尚更、怒られるんじゃないかな。

ユピカ ずっとね、気になってたの。

ソライ なにが？

ユピカ この道、どこまで続いてるんだらうって。

ソライ となり街に着くでしょう。

ユピカ そんなのわかってる。

ソライ わかってるんじゃない。

ユピカ そうじゃない。わかってるけど、しらない。

ソライ えええ？

ユピカ
ソライ

ねえ、なにかキラキラしたの知らない？モノじゃなければ人でもいいわ。何かキラキラがこつちにあるんじゃないかって思ってるの。

ユピカ
ソライ

それがホントの理由？

ユピカ
ソライ

え？

ユピカ
ソライ

知りたくなかったけど、知ってる。

ユピカ
ソライ

なにになに？

ユピカ
ソライ

でも、キラキラっていうか、たぶんキラキラっていうか。

ユピカ
ソライ

教えてよ。

ユピカ
ソライ

いや、でも、これはねえ。

ユピカ
ソライ

ねえ、何がいるの？

ユピカ
ソライ

本当に聞きたい？

ユピカ
ソライ

聞きたい。

ユピカ
ソライ

命賭ける？

ユピカ
ソライ

…賭ける。

ユピカ
ソライ

(小さな声で)口裂け女。

ユピカ
ソライ

何？聞こえない。

ユピカ
ソライ

口裂け女！

ユピカ
ソライ

うん、噂になってるんだ。夕方になると、赤い上着とマスクをつけた女の人だね、子どもに向かって「わたし、キレイ？」って尋ねてくるの。そう言ってマスクを外すと、口が耳まで裂けてるんだって。

ユピカ
ソライ

そんなのがいるの！

ユピカ
ソライ

噂だよ。

ユピカ
ソライ

思い出した。テレビで見たことあるわ、その話。

ユピカ
ソライ

テレビのはニセモノだから。

ユピカ
ソライ

そうなの？

テレビの中のことは、ホンモノじゃない方が多いと思うよ。

この街の口裂け女はホンモノなの？

それが、わからないんだ。その噂を聞いてから、この辺を毎日探してる。

それで、これ(空への憧れ)にひっかかったの？

うん。

ふーん。口裂け女は見つかったの？

まだ見たこと無いんだ。

じゃあいないんだわ。見間違えたのよ、きつと。

でも火の無いところに煙は立たず、っていうじゃない。

そんなこと聞いたらますます怖くなってきた。

帰る？

ユピカ
ソライ
ユピカ
いや、大丈夫よ。もし出くわしてもなんとかするわ。逃げるのは得意なの、あたし。よくお母さんの目を盗んで家から抜け出して野良猫と遊んだりしてるんだから。家では良い子にしてるんじゃないの？

ソライ
ユピカ
まあいいや。じゃあ、教えてあげる。
何を？

ソライ
ユピカ
撃退法。口裂け女に向かってポマードって叫ぶと、驚いて逃げるんだって。
ポマード？ポマードって、言うだけでいいの？

ソライ
ユピカ
うん。口裂け女はポマードの匂いが嫌いで、ポマードって言葉を聞くだけでも嫌なんだって。本当に効くかどうかはわかんないけど。
頼りないわね。

ソライ
ユピカ
ソライ
教えてあげたんだから、見つかったら教えて。
わかった。見つけたら真っ先に教えてあげる。
ありがとう。そろそろ行くね。

ソライ、行こうとして止まる。

ソライ
ユピカ
今の君ってさ。迷子してるみたいだね。

ソライ
ユピカ
迷子してる？
迷子中？
どういうこと？迷子って、なるものでしょ、するものじゃないでしょ。

ソライ
ユピカ
あたしはこれから迷子します。これ以上探さなくてください。
それは迷子じゃなくて家出でしょ。

ソライ
ユピカ
家出じゃなくて迷子でしょ。
迷子ってさ、いないことに誰かが気がついてはじめて迷子になるのよ。あたしが家に帰ってこないことにお母さんが気づかないうちは、あたしは迷子じゃない。

ソライ
ユピカ
どうだろうね、家に帰ってないだけだと家出じゃない。まだ迷子にはならないでしょ。君が「迷った」って確信しないうちは、君はまだ迷子じゃないね。

ユピカ
ソライ
ユピカ
あたし、迷子だと思う？
それは僕には答えられない。
迷子中…。

ソライ
ユピカ
あ、今日は流れ星が見えるらしいよ。
そうなんだ。
気をつけてね。

ユピカ
ソライ
え？…うん。
じゃあね。

ソライ、退場。

楽士たち、動きだし、詩を誦んじるようにつぶやく。

② ストンプ「楽士たち／＼ユピカ」

またゆっくりとさきほどと同じ速度の足音によってテンポが刻まれる。
テンポが楽士たちによって形作られるころ、ユピカも楽士たちと同じ台詞を遅れて話しながら再び【空への憧れ】の近くへいく。テンポはずっと続いている。

ユピカ

あたしはみっちゃんとななちゃんに手を振ってバイバイと言って別れました。いつも遊んでいた公園から家へ帰る道を歩き、十字路にたどり着きました。十字路はいつものようにまっすぐで、生垣の上に色んな屋根が見えました。

あたしのお家へ帰る道は、ここで右へ曲がるのが本当ですが、そのときは何故か、本当に何故か、逆をいききたくなかったです。理由はありません。理由をつけるつもりもありません。あえて言うなら、運命でした。運命に逆らうことなくわたしは左へ曲がりました。あの時のあたしの中にはただ、この道の先がどうなっているか知りたい胸のワクワクと、妖怪や、宇宙人が待ち構えていたらどうしよう、という不安が半々にありました。

これが、あたしの迷子の始まりです。

ストンプは楽士たちのゆっくりとした足音の退場によってフェードアウトする。

【宇宙のふたご篇】

と、その時空に流れ星が写る。

ユピカ

あ、流れ星。

流れ星はどんどん近付いてきて、着地。カストールが舞台に出てくる。

カストール

《双子座のあわきひかりはまたわれに告げて頼（ふる）いぬ（水いろのうれい）》

ユピカ

…？

カストール

《双子座のあわきひかりはまたわれに告げて頼（ふる）いぬ（水いろのうれい）》

ユピカ

あなた、何を言ってるの？

カストール

（我らの星の民の言葉が通じぬのか。）

ユピカ

（日本語をしゃべっている気はするけど…。）

カストール

お主、何者だ？いやしかし、まずは尋ねたい。ここは何処であるのか教えてもらえ

まいか。

ユピカ

ここ？えっとねえ…三丁目よ。

カストール

サンチョウメ？サンチョウメという星は聞いたことが無いが。

ユピカ

星？三丁目は星の名前じゃないわ。ここは三丁目ってだけよ。

カストール

私に嘘を言ったということか？

ユピカ

違うわ。町の名前を聞いてきたのかと思ったの。星の名前は地球じゃない。当たり前

前でしょ？

カストール
ユピカ
カストール
ユピカ

チキユウ。ここは地球という星であるのか。
ねえ。地球を知らないの？…変な恰好だし、あなた宇宙人？
然り。少なくともこの星の生まれではない。

それにしてもあんまり地球人と変わらないのね。あたしてつきり宇宙人ってタコミ
たいなのだと思うってたのに。

カストール
ユピカ

タコ？
ああ、えっと、なんていうのかしら、頭がこうあって、そこから足がいっぱい
ようによってあって、体は柔らかくて、海…たくさんの塩水の中に住んでいる生き
物のことよ。

カストール
ユピカ

がはは！そのような野性味溢れる形態の者共と一緒にされてしまっっては困る。
タコじゃなくて安心したわ。日本語も通じるし。

カストール

他の星の民の言葉でも、我が星の誇る素晴らしき装置できちんと理解できるように
組み込まれておるのさ。わが名はカストール。で、お主の名は何という？

ユピカ

あたし？あたしはユピカ。ただの迷子です。

カストール

ま、迷子―！

カストール、ユピカと握手をする。

カストール

いやあ、ここで迷子に会えるとは！なんとという幸運！

ユピカ

ちよっと、痛いわ。

カストール

おっと、失礼。

カストール、ユピカの手を離す。

ユピカ

確かに、迷子は珍しいかもしれないけど。

カストール

奇遇ですなあ。私も実は今、迷子中なのです。

ユピカ

え！迷子中！？

カストール

然り。

ユピカ

そうなの？あたし以外にも迷子の人がいるなんて。

カストール

ええ。私も随分と驚いています。どうか今までの無礼はお許しください。

ユピカ

別に、全然気にしてないわ。

カストール

あなたは迷子中なのに随分と明るく振舞っておられますな。

ユピカ

そうね、あたしは自分で迷子になったから。

カストール

ほほう、この星の人間は自分から迷子になるのですか。

ユピカ

いや、それはあたしだけかも。

カストール

ふむ。一見理不尽に見える行動も、当人にとってはなにか意味を見出してる、と。

ユピカ

こんなところですか？

カストール

あなたの言っていること、難しいわ。
ははは。あなたよりも年上ですからね。使うべき言葉というのは決まってくるもの
です。

ユピカ そうなのね。見た目にはわからないけど、きっとあたしなんかよりもずっと大人なんだわ。カストールは、どうして迷子に？

カストール 聞いていただけますかな？

ユピカ 面白そう。聞かせて。

カストール 油断です。

ユピカ 油断？

カストール 私はアストロノーツ、この宇宙を旅する者の一員です。

ユピカ アストロノーツ！知ってる、宇宙飛行士のことね。

カストール そうです、お詳しいですな。

ユピカ 何かの本で読んだのよ。でもすごいわ。宇宙飛行士なんて。

カストール 私共は真夏の北十字星、白鳥の並びにある惑星系から生まれました。しかしある年、我が故郷を照らしていた恒星、あなた達の惑星系でいうところの太陽が、突如冷え切ったのです。

ユピカ 太陽が冷える？

カストール そう、そのままでは故郷の星は全て冷え切ってしまう。そこで我らの星の民は一千八百四十光年をかけて、新たな太陽を求めて散り散りになり移動をしているのです。行きつく先のわからぬ、いつ終わるとも知れぬ大旅をね。

ユピカ ふうん。

カストール それが、ちよつとした不注意で迷ってしまうとは！自らの油断が生んだ不幸！なんという絶望！ついに迷子になってしまったわたしは、慌ててこの星に不時着したというわけで。

ユピカ なるほどねえ。

カストール そういった事情なのです。

ユピカ そうなのね、あなたとあたしは一緒。

カストール お互い迷子ですな。

ユピカ 今のところは。

カストール 今のところは。

ふたり、ニコリとする。

ユピカ それにしても太陽が冷えるなんて、そんなことあるのね。

カストール 我らの命がいつか終わるように、爛々と輝く天空の星々もいつか終わりを迎えます。

それはなにも逃れることのできない定め。

ユピカ うん。難しいけど、わかるわ。その辺の虫も、花も、あたしも貴方も、いつかは死んでしまう。

カストール そうです。

ユピカ 少し、さみしいわ。

カストール そうですね、少し、さみしいですね。

ユピカ …ねえ、カストール。あなたのふるさとの星はこの空のどこにあるの？

カストール まだ黄昏時で：残念ながら見えませんな。我らの星はここからはとても離れているのです。思えば随分と遠くはなれたところまで来てしまったものだ。

ユピカ
カストール
遠いのね…遠い遠いところから、また果てしない遠いところへ。
(頷いて)ええ。

ユピカ、カストール、空を見上げる。夕闇が差し迫っている。

カストール
既に救急の通信を送っております。弟がこの通信を受信すればこの星の位置も把握できるでしょう。

ユピカ
弟さんがいるの。それじゃあ、助かるのね。

カストール
ええ。いつまでも迷子しているわけにもいきませんからな。

ユピカ
救急の信号って、すぐに届かないの？

カストール
どうでしょう…。まあ、今頃心配して血眼になって探しているはずですよ。きっとすぐに来ますよ。

ユピカ
ねえ、あたしも連れて行って。

カストール
それは…できませんな。

ユピカ
どうして？

カストール
我らの決まりで違う星の民を、乗せることは叶わないのです。

ユピカ
そうなの。残念だけど、それなら仕方ないわ。

カストール
申し訳ない。

ユピカ
気にしないで。迷惑になるんだろうし、それにあたし良い子だから。聞き分けはいいの。

カストール
そうですね。聞き分けが良い、というのは大事なことです。

ポルックス
兄者、兄者！

ポルックス、登場。

ポルックス
兄者！探したぞ！

カストール
弟よ！

ポルックス
兄者！(抱き合おうとする)

カストール
(思いとどまって)いやまて、ここで抱き合うにはまだ早い。

ポルックス
なんだって？！

カストール
わが星の民であるならば、答えられるはずだ。《双子座のあわきひかりはまたわれに告げて顫(ふる)いぬ水いろのうれい》

ポルックス
《風吹けばこころなみだちうすぐもの空に双子のみどりひかれる》

カストール
弟よー！

ポルックス
兄者ー！

カストール、ポルックス、ひしと抱き合う。

ポルックス
兄者！もう迷子にならないでくれよ！心配したんだぞ！
カストール
心配をかけたな。

ポルックス 心配で夜も寝れずに昼寝してたんだからな！
カストール ははは、こやつめ。
ユピカ 見つかってよかったわね。
ポルックス 兄者、この人は？
カストール ああ、この方はユピカ殿。私と同じで迷子中の人だよ。
ポルックス なんと！

ポルックス、ユピカと握手をする。

ポルックス 迷子ですか！いやー、迷子ですか！迷子なんですわえ。
ユピカ なんか迷子迷子って、たくさん言われるとフクザツだわ。
ポルックス ああ、これは失敬。

カストール このように少々抜けたところのある弟ですが、かわいいもんです。
ポルックス 兄者！その言い草はひどいんじゃないか！大体、抜けているのは兄者の方じゃないか！

カストール なんだってー！？

ポルックス そんな歳にもなつて迷子だなんて、恥ずかしいことなんだぞ！

カストール そうかそうか！それは悪かった！

ポルックス 次からは気を付けるんだぞ！

カストール ああ、気を付けよう！

ポルックス もう迷子になんかなるんじゃないぞ！

カストール 迷子になんか二度となるものか！

ポルックス 兄者ー！

カストール 弟よー！

カストール、ポルックス、爆笑しながら抱き合う。

ユピカ 仲良しね。ずっと二人で旅をしているんだものね。

カストール その通りです。これからもずっとふたりです。

ポルックス 兄者。そろそろ向かおう。迷子になった分、遅くなってしまう。

ユピカ もういつちやうの？

ポルックス いきまず。私たちの夢見る新しい太陽を探すため、まだまだ道のりは長いですから

ね。さ、兄者行こう！

カストール ああ。

ユピカ お別れね。

カストール ここに辿り着いた事は不幸の道筋でしたが、貴女にお会いできたことは幸運でした。
ポルックス 私も、できればしばらく貴女とお話ししてみたかったです、時間が差し迫って

いますゆえ。貴女のご事は、道中兄者から聞きますよ。

ユピカ 気をつけてね。

カストール 貴女も。

ユピカ あたし？

カストール

迷えば迷うだけ、たどり着くのが遅くなります。ユピカ殿がどこへ行きたいのかは、それはわかりませんが、ずっと迷子してるわけにもいかないでしょう、ということはお伝えしておきますぞ。

ユピカ うん：わかったわ。

③ ストンプ「カストール」ポルックス」

カストールとポルックスのコンビネーション。二人でモノを持ってお互いに叩き合うとか。派手な音がする、アクティブなかんじ。

カストール では、さらば！

ポルックス あなたの上に平穩がありますように！

ストンプののち、カストール、ポルックス、退場。

ユピカ いっちゃったわ。

【ユピカとソライ篇その2】

舞台のはしっこから、ソライが顔を出す。

ソライ 見なかった？

ユピカ 見たわ。

ソライ 見たの？

ユピカ うん。

ソライ 一番初めに教えてくれるっていったのに。

ユピカ 何の話？

ソライ ひどい、もう覚えてないの！

ユピカ ああ、違うわよ、あたしが見たのは流れ星よ。

ソライ ああ、ガニノメの流れ星ね、僕も見ただよ。きれいだったねえ。

ユピカ そう、見ていたのは流れ星。あとね、宇宙人にも会ったのよ。

ソライ 宇宙人に?!マジ!?

ユピカ 超マジよ。いろいろお話したわ。

ソライ そんなのいるわけないじゃない。

ユピカ あたしはあったのよ。色々お話したわ。言葉も通じたし、面白い人たちだった。

ソライ ふーん。

ユピカ 信じないの？

ソライ 宇宙人って、テレビの中にしかないじゃない。

ユピカ そんなことないわ。あたしが嘘ついてるっていうの？

ソライ そうは言っていないじゃない。

ユピカ、硬直。

ユピカ なんで、それ、知ってるの。

ソライ もう一回、この辺を回ってみる。口裂け女に気をつけてね。

ユピカ ちよつとまって！質問に答えてないわ！

ソライ、はける。

ユピカはソライが走り去った方向をみつめている。

【ジェニーちゃん】

そのとき、マスクをして赤いコートを着た女がユピカの背後に立つ。
気づいたユピカ、驚いてはねのく。

赤いコートを着た女はどどんユピカに近づく。

ユピカ ポマード！

赤いコートを着た女、ピタつととまる。

ユピカ （効いたものと思ひ込み）ポマード！ポマード！ポマード！

赤いコートを着た女、ゆっくりとマスクを外す。脅えるユピカ。

ユピカ ひっ！

ジェニーちゃん わたし、キレイ？

ユピカ …。ジェニーちゃん？

ジェニーちゃん ひっかかった！ユピカちゃん、だまされやすいのね。将来が心配だわ。

ユピカ ジェニーちゃんが大きくなってる！

ジェニーちゃん どうせわたしのこと、口裂け女か何かだと思っただんでしょ。

ユピカ そしてしゃべってる。

ジェニーちゃん ユピカちゃん、またわたしのこと、公園に置き去りにしたでしょ。

ユピカ えっ？うそ？

ユピカ、ごそごそと荷物を探る。

ユピカ 本当だ。ない。

ジェニーちゃん もう！お母さんが探してくれなかったら、またわたし砂場の上で夜を越すところだ
ったわ。

ユピカ お母さん！？

ジェニーちゃん そうよ、ユピカちゃん、前もわたしを無くして泣いたでしょ？その時も真つ暗闇の中、おかあさんが私を見つけてくれたんだからね。

ユピカ つて、ことは、お母さん、あたしが家に帰ってないの知ってるのね。

ジェニーちゃん そうよ、カンカンよ。だからわたしもユピカちゃんと探しに来たの。

ユピカ やった！

ジェニーちゃん なに？

ユピカ あたし、ついに迷子になれたんだわ！嬉しい。

ジェニーちゃん なにいつてるのよユピカちゃん。おうちに帰るのよ。

ユピカ 嫌！まだ帰らないの。

ジェニーちゃん ねえ、一緒に帰りましょうよ。今ならまだおかあさんもそんなに怒らないはずよ。

ユピカ お母さんが怖くて迷子なんてできないわ。

ジェニーちゃん そろそろテレビ、はじまるよ。

ユピカ 見なくてもいい。さつき教えてもらったの、テレビはホンモノじゃない方が多いつて。

ジェニーちゃん ねえ、わたしすぐにもお風呂に入りたいの、泥を落としたいのよ。

ユピカ 折角迷子になったのよ、まだ帰れないわ。

ジェニーちゃん もう、駄目よ。このまま行って帰れなくなっても良いの？まだ道がわかるわ、家まで帰りましょう。

ユピカ もう、ジェニーちゃんお人形のくせにうるさい！あたしに指図しないでよ！

ジェニーちゃん ひどいわユピカちゃん！
ユピカ きらいよジェニーちゃん！いつもあたしの言うとおりに着替えたり、おうちで暮らしてるのに！こんな風にあたしに立て付くなんてこと、今まで一度だつて無かったわ！

ジェニーちゃん ねえ、ユピカちゃん、わたしは心配して言ってるのよ。わかってるの？迷子になるつてことは、おうちに帰れなくなるつてことなのよ。

ユピカ う…。

ジェニーちゃん 本当に迷子になったら、帰られなくなったら、もうお母さんとも、みっちゃんとも、誰とも会えなくなるつてことなのよ。それでもいいの？

ユピカ ジェニーちゃんは知らないのよ。もう、あたしは誰とも会えなくなるの。だから会えなくても良いの！

ジェニーちゃん だめよユピカちゃん。やっぱり帰りましょう！

ジェニーちゃん、ユピカの手をひっぱり、家へ帰ろうとする。

ユピカ いや、いやよ！あたしはまだ迷子でいたいなのよ！

ユピカ、ジェニーちゃんの手を払う。ジェニーちゃん、突つ伏す。

ジェニーちゃん いたーい！

ユピカ あっ…。

ジェニーちゃん やだ、動けないわ。体が折れちゃったのかも。ねえ、ユピカちゃん、一緒に帰りましょ。

ユピカ いやよ。もうあんたはここで捨ててくわ。あたしもそろそろお人形遊びやめようと思つてたのよ。だつて子供っぽいじゃない。

ジェニーちゃん そんな、ユピカちゃん、お願いよ。ぬいぐるみだつて、ずっと置いてあるじゃない。今さらわたしを捨てるなんて。

ユピカ ぬいぐるみは飾っておけるけど、お人形さんはちがうわ。ジェニーちゃんなんか、遊ばなくなったら用無しよ。ここにおいてくわ。

ジェニーちゃん …もう、やんなっちゃうわあ。

ジェニーちゃん、フラリと起き上がる。

ジェニーちゃん こんなにお願いしてるのに、なんにもきいてくれないわあ。

ユピカ ジェニーちゃん、起きられるんじゃない。

ジェニーちゃん お母さんは、まだ、わたしのいうこと聞いてくれるのに、ユピカちゃんは全然だめねえ。

ユピカ だめつて、なによ。

ジェニーちゃん 何人めかしらあ。最後はみんな、わたしのこと捨てちゃうのよねえ。

ユピカ 何言つてるのよ。ジェニーちゃんはあたしのものでしょ。

ジェニーちゃん 知つてるくせに。おもちや屋さんにはわたしがいっぱい並んでいるのよ。わたしはずつと夢を見ていたのに、ユピカちゃんみたいな女の子がわたしと遊びたくていつもわたしを揺り起こすのよ。だからあたし、たくさん女の子と遊んできてるの。そしてわかつたの。

ユピカ どうしちやつたの、ジェニーちゃん。

ジェニーちゃん わたしもいっぱいいるけど、あんたみたいなのもいっぱいいるわ。だつていっぱい見てきたもの。だから、あんたもたくさん生まれくるのよ。

ユピカ わけのわからないこと言わないでよ。

ジェニーちゃん でもねユピカちゃん、気を付けるのよ。たくさん生まれてきたあんたは、間違つたら一つになつてしまふんだからね。

ユピカ 全然、言つてることがわからないわ。

ジェニーちゃん そうよねえ。ユピカちゃん、いつもそうよねえ。でも本当は全部知ってるのよ。それが知らないふりつていうのよお。

ユピカ あつそう。だから？

ジェニーちゃん うふふふ。凶星だから焦ってる。かわいいわあ。

ユピカ やめてジェニーちゃん！早くいっっちゃつて！いなくなつてよ！

④ ストンプ「わたし」たち」

連打する音とともに、ユピカと同じ格好をした「わたし」が次々と出てくる。

「わたし」はジェニーちゃんをもちあげ、舞台の裏にポイッと捨ててしまふ。

【「わたし」革命篇】

「わたし」の番号はそれぞれ18号(嫌)、281号(腐敗)、483号(弱み)、810号(罵倒)である。

18号 捨てたわ。

281号 捨ててやったわ。

483号 またつまらないものを捨ててしまったわ。

810号 あれ、あの子「わたし」じゃない？

18号 ここにもいたの。

281号 めずらしいわね。

483号 あら、さっきもいたわよ。

281号 それは79号でしょ。

483号 79号はアスファルト歩きながらフライドポテト食べていたわ。

18号 それは53号でしょ。

483号 いいえ、79号だったわ。

810号 そうよ違うはずよ。今ごろ53号はテレビ見ながら緑のマニキュア付けているわ。

281号 そんなことしているかしら。

18号 していたわよ、間違いないわ。

281号 あてになるのかしら。

810号 夢でも見てたんじゃない？

18号 信じてよ、できるでしょ。

483号 そこまで言うなら信じてあげるわ。

18号 さすが「わたし」だわ。

810号 ねえ、そういえば108号はどこにいるの？

483号 そういえば見ないわね。

18号 どこにいるのかしら？

483号 どこにいったのかしら？

281号 イチゴのお風呂で半身浴しているんじゃない？

810号 それはもう、とうの昔に終わっているはずだわ。

281号 じゃあなにしているっていうのよ。

483号 もしかして。

18号 なに？

281号 なになに？

810号 いってみなさいよ。

483号 どこかで野たれ死んでいるんじゃない？

「わたし」全員 え！

810号 やだ、死んじゃっているなんて。

18号 マンションの屋上から飛び降りたのかしら。

18号以外 なんて馬鹿なことしたのよ！

483号
483号以外
281号
281号以外
810号
18号
483号
281号
「わたし」全員
お馬鹿さんよねえ。
ねえ、じゃあここにいるのは？
281号
108号ではないわね。
53号でもない。
79号ですらないわ。
483号
「わたし」全員
あなた、だあれ？
あたし？ユピカよ。
名前を聞いているんじゃないわ！
483号
番号よ。
18号
そうよ、番号よ。
番号を言ってみなさいよ。
810号
「わたし」なら、番号を言えるはずだわ。
281号
「わたし」全員
あんたの番号いくつよ。
ユピカ
そんなもの知らない。あたしに番号なんて無いわ。
18号
嘘よ。
番号が無いなんて、欠陥品だわ。
281号
欠陥品がその辺をぶらぶらしないで頂戴！
810号
確かに、あたしは完全じゃないかもしれないけど、でも、それはあんたたちだって
ユピカ
そうでしょ。
483号
そういわれれば確かにそうね。
281号
完全無欠ではないわね。
810号
そうだわ、なぜ気づかなかったのかしら。
18号
流石、言うことが違うわ。
「わたし」全員
「わたし」だからねえ。
ユピカ
だから、違うってば。
483号
あんたは「わたし」でしょ。
ユピカ
あたしがあんたと同じってこと？
281号
そうでしょう。
ユピカ
あたしが？どうして、「わたし」なの？
18号
あんただけじゃないわ。
483号
「わたし」はいっぱいいるのよ。
483号
「わたし」はいっぱい生きているのよ。

281号 「わたし」は今もどんどん生まれているのよ。
ユピカ きつと何かの勘違いじゃあないの。あたしはあんたたちのいう「わたし」じゃないもの。

18号 ではどうして同じ格好をしているの。
ユピカ それは逆だわ。あんたたちがあたしの格好をしているだけよ。
483号 なにいつているのよ。「わたし」たちは「わたし」なんだから、おなじものを着いて当然じゃない。

ユピカ ふざけないでよ。
810号 ふざけているのはあなたのほうよ。
ユピカ あたし、少なくともあんたたちよりまともだとおもうわ。
「わたし」全員 あんたが「わたし」よりまともですって？ふん、笑っちゃうわ。
18号 かけっこはいつも2位か3位だったわ。
810号 暗算のテストで百点をとったことが無いわ。
483号 ピアノのおけいこも書道を習うのも途中でやめちゃったわ。
281号 書初めをするのが大嫌いだったのよ。
483号 知っているわ。
810号 墨で手が黒くなるのがイヤだったのよ。
18号 無理やりやらせる先生も好きじゃなかったもの。
483号 おかげでちつともうまくならなかったわ。
「わたし」全員 知ってる、知ってる。
ユピカ なんてあたしのことを知っているの？
18号 「わたし」のことだもの、当たり前よ。
483号 自分のことを一番知っているはずだわ。
281号 「わたし」なら、「わたし」のことは覚えているはずだわ。
483号 あんた、「わたし」の事も知らないの？
810号 「わたし」のくせに。
「わたし」なのに。
「わたし」全員 あんた、本当に「わたし」なの？
483号 怪しいわ。
18号 疑わしいわ。
810号 調べるべきだわ。
ユピカ やめてよ、そんなこと。
281号 あんた「わたし」じゃないかもしれないじゃない。
ユピカ あんたたちとは違うわ。一緒にしないで。
281号 いけないわ。「わたし」が「わたし」でないなんて、いけないわ。
483号 怪しいわ。
18号 疑わしいわ。
810号 調べるべきだわ。
ユピカ やめてよ、あんたたちにそんな権利ないわ。触らないで！
18号 いやだわ。

281号 生意気だわ。
483号 可愛くないわ。
810号 ぜんぜんダメだわ。
「わたし」全員 ぜんっぜん、「わたし」なんてかわいくないわ！
ユピカ やめてよ！

間。

ユピカ …あたしが可愛くないなんて、あたしが一番知ってるわ。だからそれ以上、言わないで。お願い。

810号 ちよつと待って！
18号 どうしたのよ。

810号 これ、(ユピカを指して)これも「わたし」なのよね。
483号 たぶんそうよ。

810号 ということは、わたしたちも可愛くないのかしら。
281号 あらやだ、そういうことになるの？

483号 いやよ、「わたし」は可愛いわ。
18号 何言っているのよ、「わたし」が一番かわいいわ。

810号 「わたし」が一番かわいいに決まっているわ。
「わたし」が一番かわいいのよ。

810号 じゃあ、可愛くないあの子は？
281号 「わたし」が可愛くないなんて知れたら一大事だわ。

483号 そうね、タダゴトじゃないわ。
18号 捨てちゃいませよ。

281号 捨てちゃうの？
483号 ちよつと勇気があるわね。

810号 「わたし」を捨てたことなんてないもの。
18号 大丈夫よ、ジェニーちゃんを捨てる時みたいにするばいいのよ。

「わたし」全員 それならできそうだわ。
18号 いいわね、そうしましよ。

281号 それがいいと思うわ。
483号 番号も無いし、欠陥品に用は無いわ。

810号 代わりはまだまだたくさんいるもの。
「わたし」全員 あんたなんかいなくなっちゃえ！

「わたし」たち、足音を鳴らしながらユピカに近づき、持ち上げる。そしてジェニーちゃんの時と同じように、放り投げる(ような動作)。しかし「わたし」たちはユピカは捨てることが出来ず、ユピカは空への憧れにしがみつく。それを見た「わたし」がユピカを覆いかぶさり、重なり、奇妙な「わたし」を形作っていく。「わたし」は、空への憧れに吸い込まれていく。

ユピカ

あたしが、「わたし」と一緒になっていく。

カストールとポルックスが、それぞれタナトスとヒュプノスになり、大きなマントで「わたし」を覆い隠す。

【ユピカとソライ篇その3】

ソライ、舞台中央に表れて、空への憧れからユピカを引っ張り出す。
ユピカとソライだけの世界になる。

ソライ

だから気を付けてっていったのに。

ユピカ

きらい、きらいよ、あたしなんて嫌い。

ソライ

どうしたの。

ユピカ

あんなのもあたしだなんて。

ソライ

しっかりして。

ユピカ

かわいくないの、あたし、でもそんなの知ってる。

ソライ

甘えないで。

ユピカ

…。

ソライ

そんなことないよって言うてほしい？

ユピカ

…。

ソライ

口裂け女、いなくてちよっぴり残念。けっこう本気で探してたんだけどな。

ソライ、人形に戻ったジェニーちゃんをユピカに渡す。

ユピカ

あたしが、生み出したのね。

ソライ

そうだね。

ユピカ

あのジェニーちゃんも「わたし」なのね。

ソライ

さっきのたくさんのゆみこちゃんは、残りかすみたいなもの。あんまりちゃんとして

てなかったもの。

ユピカ

帰りたくない。

ソライ

ダメだよ、帰らなきゃ。

ユピカ

…。あたし、いなくなるの。

ソライ

どういうこと？

ユピカ

あたし、引越すの。山の向こうの大きな町へ。もう、ここには戻れないの。

ソライ

それが迷子の理由？

ユピカ

おかあさんたちが決めたの、どうしようもないの。

ソライ

子供だからね。

ユピカ

でも本当はあたし、行きたくない。

ソライ

どうして。

ユピカ

だって、行くのが怖い。みんなに手紙書くねって約束したけど、忘れられちゃうこ

とが、すごく怖い。

ソライ

そんなことないよ、親友なんですよ。

ユピカ

そんなのわからないわ。でも一番嫌なのは、あたしがそうしてしまうんじゃないかってことよ。わたしもみんなを忘れて、みんなもあたしを忘れて。それであたしはここにいたことが無かったことにされるなんて。

ソライ

少し、さみしいね。

ユピカ

そうね、少し、寂しいわね。でも、それでもいいかもって、あたし良い子だから納得したの。新しい場所には、新しいあたしがいればいいんだから。新しいあたしは、まだ誰も知らない、きっときれいなあたしなの。

ユピカ、飛び跳ねながら、歩く。

ユピカ

だからね、いやなあたし、きらいなあたし、歩きながら一歩ずつ置いてきたの。

ユピカ、一歩。

ユピカ

これは、ホットケーキの粉を床にこぼして怒られたとき。

ユピカ、一歩。

ユピカ

これは、みっちゃんに借りた漫画を汚しちゃったとき。

ユピカ、一歩。

ユピカ

これは、書初めを怒られながらやっていたとき。

ユピカ、一歩。

ユピカ

あの宇宙を飛んで行った双子がうらやましかったとき。

ユピカ、一歩。

ユピカ

ジェニーちゃんを公園に捨ててきたとき。

ユピカ、一歩。

ユピカ

そんなことをしてるあたしが一番かわいくないことを知ったとき。

ソライ

そうやって、全部置いていくの？

ユピカ

うん。こんな風にね、きらいなあたしを置いていきたかった。そうしたら、気づいたら、あたしは迷っていたの。

ソライ そんなことしていたら迷子じゃなくなるよ。
ユピカ どうして？今、あたしは迷子なのよ。

ソライ そんな風にどんだん置いて行ったら、ユピカちゃんがユピカでなくなってしまうで
しょう。

ユピカ でもそれでよかった。わたしなんでものが、少しずつ曖昧に感じていくのが気持ち
よかったの。

あの宇宙の双子みたいに遠くへ行ってしまうあたしは、これから向かうあの町では、
せめて良い子のきれいなあたしでいたかった。…でもできなかった。

ソライ 置いただけじゃダメだよ。本当にいららないなら、ちゃんと捨てなくちゃ。

ユピカ そうね。みんな、あたしを見つけたら寄ってきたものね。

ソライ 置いて行った「わたし」たちは、やっぱりもとに戻りたかったんだと思うよ。

ユピカ そうね。たーくん。

ユピカ、ソライに向く。ユピカ、ソライを指さしてその指を自分へ持つてくる。

ユピカ あなたも「わたし」ね。

ソライ、うなずいて人形をユピカに渡す。

ソライ 思い出してくれたんだね。

ユピカ やっぱりたーくんだった。

ソライ 僕まで、置いていかないでよ。

ユピカ ごめんなさい。でも、もう大丈夫だから。

ソライ うん。大丈夫。

決心したユピカ、ソライと手をつなぐ。

ユピカ あたし、やっぱり帰る。

ソライ うん。

ユピカ ここからあの町まで、どれくらいだろう。

ソライ どうだろうね。少なくとも、迷子より長い時間がかかるよね。

ユピカ 帰ったら、おかあさん怒るだろうな。

ソライ おかあさん、怒ると怖いからね。

ユピカ でもあたし、許そうと思うわ。お母さんを。

ソライ 許す？許してもらうんじゃないか？

ユピカ あたしがこの迷子でわかったことは、お母さんも知らないことだから。どんなに叱
られても、わたしと「わたし」の秘密にしておくの。

ソライ うん。

ユピカ 今、この瞬間も、世界はわたしのものなんだから。

⑤ ストンプ「楽士たち」

オープニングと同じように楽士たちがユピカとソライの元にやってくる。拍子も似ているが、そのリズムは応援歌のようでもある。

ユピカ

これで、あたしの迷子は終わりです。この後のあたしのことを話します。まずわたしはお母さんに叱られて、話を聞いたお父さんにも叱られます。でもどうして迷子になったかは絶対に言わないことにしました。これからは、あの町に向かって長い、長い、お引越しの旅がはじまります。

あたしは、やっぱりこの町で起きたことを持つていくことにしました。ジェニーちゃんを捨てたこと、宇宙の双子に遭遇したこと、みっちゃんとななちゃんと最後に遊んだこと、ソライくんに助けてもらったこと、とにかく覚えていることをできる限りです。

あたしがいつか大人になって、自分で決めたユピカではなく、お父さんの方のおじいさんにつけてもらった「ゆみこ」でいられるようになるまで、あたしの冒険を「わたし」の中にもいつまでも残しておくことにします。

⑥ ストンプ「ユピカ&ソライ&楽士たち」

ラストのストンプ。ラストにふさわしい、しっかりしたかんじ。

ストンプが終わり、楽士たちが舞台から消えていく。

舞台には音も光も一つも残らず、夜になる。幕が閉じる。

終わり

※劇中のカストールとポルクスの◇部分の台詞は宮沢賢治の短歌からそれぞれ引用させていただきました。

初演公演情報

劇団コトナコナタ第5回公演「迷子のユピカ」作/演出・稲邊弘康
2013年2月9日(土)～10日(日)

於・いわてアートサポートセンター風のスタジオ

《CAST》

ユピカ	：	前川寛子
ソライ	：	向井達己(劇団ちゃねる)
カストール/タナトス	：	盛田洋平
ポルクス/ヒュプノス	：	千坂孝則
シエニーちゃん	：	及川麻紀(劇団かっぱ)
楽士1/「わたし」18号	：	瀧川香菜子(劇団ものべる)
楽士2/「わたし」281号	：	宮野信幸
楽士3/「わたし」483号	：	佐々悠(トラブルカフェシアター)
楽士4/「わたし」810号	：	小原英(劇団かっぱ)

《STAFF》

構成・演出/稲邊弘康

楽器製作・振付/劇団コトナコナタ

舞台監督/盛田洋平

舞台美術/佐野佑季

装置/佐野佑季、盛田洋平、宮野信幸

小道具/宮野信幸、猿橋勇人

照明/菊池瑛子、前川寛子、古泉千恵(フリー)

音響/洵口美代

衣装/工藤碧

宣伝美術/平川重寅(pmi)

制作/千坂孝則、稲邊弘康、佐野晴香(クロス)

※氏名および団体表記などは上演当時のものです

※台本の無断配布、および無断使用・上演等を禁じます

上演願いや脚本に関する
お問い合わせはこちらまで

Address: 〒029-3102

岩手県一関市花泉町金沢

字内の目 11-4 稲邊方

劇団コトナコナタ

E-mail: kotonakonata@hotmail.co.jp